

## 子どもをテストで追いつめるな!大阪集会

2月29日午後、エル大阪で標題の集会が開催された。新型コロナウイルス「騒動」により開催が危ぶまれたが、参加者で会場は一杯になった。写真は学校に「ゆとり」と「あそび」を取り戻すために～競い合いではなく、子どもと教員がつながれる教育をめざして、と題して基調提起する京都精華大学の住友剛さん。

住友さんとはフェイスブック「仲間」で、今朝も「意見」交換して親近感があった。講演をお聴きするのは初めてだ。住友さんは「子どもの権利保障」の視点から学校事故・事件研究をされており、学校で亡くなる子ども、深く傷つく子どもを見つめてきた立場から、問題を投げかける。子どもも教職員も「モノ」ではない。「人間」である。「テスト」というものには、それを作り、運用する側の価値観や人間観、(教育)思想がべったりと貼り付いているのでは?



この集会の主催者は「子どもをテストで追いつめるな!市民の会」。大阪市の保護者である京都造形芸術大学の濱元伸彦さんが大阪の教育「改悪」と「市民の会」の活動について解説する。濱元さん司会によるパネルディスカッションでは、佐々木サミュエルズ純子さん(大阪市保護者、インクルーシブ教育をすすめる会)と大阪市の現職の校長・教員が意見を交換しあう。



ここでは大阪の教育の現状を集会資料から紹介したい。一大阪市の中学校では、全国学力テストに加え、高校入試の内申点に反映される大阪府チャレンジテスト(中1・2・3)と大阪市統一テスト(中3)、各学期に行われる中間・期末テストなど、他府県に比べて突出してテスト漬けになっています。授業はテスト時間を確保するために速く進められたり、通常の授業を削ってテスト対策授業が行われたりしています。2019年9月5日、大阪府教委は、チャレンジテストの「見直し」を公表しました。これまで中学3年で行っていた「団体戦方式」(各学校のチャレンジテスト平均点に応じて各学校の「評定平均の範囲」を府が指定するので団体戦と呼ばれている)を、中1・2年にまで拡大するものです。「見直し」によって評定による中学校ランク付けが一層露骨になり、子どもたちは中学校入学と同時に点数競争にさらされることになります。……テスト中心の学校教育は、子どもたちに競争主義の価値観を浸透させ、ともに学びともに育つ教育、人権や共生を大切にする教育を取り組む余地をなくしていきます。全国学テやチャレンジテスト・経年テストの学校正答率をあげるために、知的障がいのある子どもなど、ペーパーテスト点数が低い子どもたちを排除する傾向が高まっています。



(2020年3月1日)